

「羽島漁港」

鹿児島県いちき串木野市

現在の羽島の波止場は、享保年間に島津藩が築いたといわれるが、その後、弘化4年(1847)に西郷隆盛がつくり直した。隆盛は、当時20歳、郡奉行書役助(河川土木方書役助)を務め、羽島の灌漑用の万福池築造工事のため串木野に来ていたが、その工事余剰金をもって羽島漁港を改修したものであり、当時の玉石積み防波堤が現存している。

羽島漁港は、古くから密貿易の基地であったようで、中世には、ここからとれる塩と密貿易の利益のため、豪族たちの奪い合いの地であったことが記録にある。また、江戸時代には、島津藩は密貿易等の監視のために遠見番所と火立番所を設置していた。

羽島漁港には、薩摩藩英国留学生の出航を伝える石碑が建てられている。生麦事件に端を発した薩英戦争で英国に捕らえられた五代友厚と松木弘安は、赦免されたあと薩摩藩に捕らえられそうになって江戸へ舞い戻り、さらに五代は長崎に行った。当時、藩の小姓役であった川村純義が五代に面会に行ったおり、五代は世界の情勢を説き、開国を進言した。この後、五代は許されて藩に戻り、上海貿易や外国留学を進言した。島津藩は、その進言を取り入れ、慶応元年(1865)に留学生15名(最終的には19名)の留学生を選んだ。一行は、幕府役人の目を逃れるため、甑島、大島への出張を名目に、改名し、羽島に滞在して、外国船の寄港を待った。五代は長崎に飛び、英国商人グラバーに依頼し、香港行き汽船オースタライエン号を羽島に寄港してもらった。潜伏から2カ月後、慶応元年3月にオースタライエン号は羽島を出航し、5月にロンドンに到着した。一行はロンドン大学で語学や近代技術を学び、その後の日本の近代化に大きな役割を残した。

一行は、大目付新納久修(当時24歳)を監督に、船奉行松木弘安(改名出水泉蔵、当時34歳)、船奉行見習五代友厚(改名関研蔵、当時31歳)、開成所書生森有礼(改名沢井鉄馬、当時19歳)等で、最年少は14歳であったと言う。

【参考資料】串木野郷土史



留学生が残した歌碑

みどころ



- 羽島崎神社太郎太郎祭り：旧暦2月4日(近年ではこれに近い日曜)に羽島崎神社で開かれる春の大祭。航海の安全を願う儀礼「船持ち(ふなもち)」と豊作を願う儀礼「田打ち(たうち)」の2つを続けて行う。鹿児島県指定無形民俗文化財。
- 羽島崎ピロウ自生地：岬の基部には羽島崎神社があり、旧の節分に行われる太郎太郎祭りでも知られる。裏の樹叢には自生するピロウが見られ、その中をめぐる遊歩道を約10分登ると前に甑島を望む展望台に出られる。